



古版本 巻頭

曾根崎 心中 付り 観音巡り

謠うた 實じつにや安樂あんらく世界せかいより、今いまこの娑婆しゃは
 に示現しげんして、我等われらが爲ための觀世音くわんぜんおん、仰あを
 ぐも高たかし高たかき屋やに、登のぼりて民たみの賑にぎはひ
 を、契ちぎり置おきてし難波津ななはづや、三みつつづ
 つとをと三みつつの里さと、札所ふだしよ札所しよの靈地れいち
 靈佛れいぶつ、巡めぐれば罪つみも夏なつの雲うみ、暑あつくろし
 とて駕籠かごをはや、あありはの乞こ目め三みつ六むく
 の、十八じゅうはち九くなるかほよ花はな、今いま咲さき出だし
 の初花はつはなに、笠かさは被きずとも召めさずとも、
 照日てるひの神かみも男神おとこがみ、よよけて日ひままけはよ

曾根崎心中

通釈 阿弥陀如来の脇士として、西方極楽浄土におわす御
 仏でありながら、今この穢れた現世にお姿を現わし、我々衆
 生の諸願を御成就下さって、一人残らずお救い下さる観世音
 菩薩は、拜むにつけても誠に貴いことである。その昔、仁徳
 天皇が高殿にお登り遊ばされて、炊煙の盛んに立ちのぼるの
 をお眺めになり、やがて民のなりわいの豊かなことを知るし
 めされたと伝え聞く難波津一名御津の里の、三十三所観音の
 札所になっている霊地・霊仏を巡拝すれば、罪障も立処に消
 滅するとは聞いているが、さて時は陰曆五月(事件は四月)の
 初め、夏らしい雲の立つ頃で、窮屈な駕籠は何分にも暑苦し
 いと、今しも駕籠から下り際の、美しい一人の女性がある。
 年頃は、出よと望む賽の目なら三六の十八九か、人懐しい目
 元である。これが季節の杜若かづらなら、今咲き出しの初花か。実
 は初花ならぬお初と呼ぶ、今売り出しの勤めの身である。空
 に輝く日の神も、昔から男神との伝えもあるから、女ななこ鬘まげりを